

II 特別シリーズ II

科学技術振興機構 『さくらサイエンスプラン』友情と感激 (番外編)

中国政府による日本の若手科学技術関係者招へいプログラム

中国政府の招聘で若手研究者・行政官等94名が訪中

予定されている。

○北京

科学技術振興機構(JST)が推進する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン)」に対応し、6月24日から29日までの日程で、中国科学技術部が日本の科学技術分野の研究者と行政官を招へいした。沖村憲樹JST上席フェローが訪中団代表となり、6月の訪中団は94人で、外務省、環境省、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、財務省、総務省、特許庁、農林水産省、文部科学省などの中央省庁、愛知県、茨城県、熊本県、佐賀県、千葉県、名古屋市長官邸、熊本市、静岡県牧之原市などの地方自治体のほか、九州大学、京都大学、東京大学、東北大学等の大学や研究機関の若手研究者も参加した。

本プログラムは今年で4年目を迎えた。昨年までに合計342人が訪中し、今年6月と10月に分けて、合計180人程度の訪中が



北京外国専門家ビル前にて全体集合



24日午後北京へ到着した訪中団一行は、38度の爽やかな晴天に恵まれた天安門広場を視察。同日夜にはレセプションが開催され、主催者である中国科技交流中心の陳志敏党委書記をはじめとする方々から温かい歓迎を受けた。25日午前は2グループに分かれて、中国の名門である清華大学、北京大学をそれぞれ訪問。午後には開催された中国政府関係者との交流座談会では、科学技術部戦略企画局、工業情報化部、生態環境部、科学技術部、ハイテク産業開発センター、中国科学院国際協力局、国家知的財産局、科学技術部中国農村技術開発センターの若手の高官らが、中国の各省における科学技術強化の取組みについて講演を行い、活発な意見交換が行われた。26日午前は中関村モデル地区を訪問し、地区の担当者から説明を受けた。中関村では昨年、1日当たり90社が起業したとのこと。政策立案を担当する若手メンバーにとって大いに参考になった。26日午後、参加者は太原、福州の2グループに分かれ、それぞれの地方で研修が始まった。

○福州

27日の午前、福州組はまず福州大学を訪問。自然豊かなキャンパスには、亜熱帯の風が吹いていた。国家大学科技园では、同大学は研究成果の産業化支援に力を入れており、企業の発展段階に合わせた支援の提供、手厚い支援体制の説明があった。続いて、分析、表面加工、材料試験の研究室を訪問。研究者と活発な意見交換があった。野菜工場やスマート家電の研究成果を見学。なお、大阪府立大学の元副学長であり、現在は福州大学の特聘教授・国際顧問である安保正一先生に同行いただいた。先生は4年に渡り日中を往復しつつ学術交流の

中国側行政官との交流座談会で質問するメンバー



太原理工大学での石炭科学に関する質疑



福建省の通信メーカーを訪問



太原鉄鋼集団の鉄鋼製造工場前にて

太原は歴史を感じさせる町並とともに、最先端の大学研究と企業活動が融合されたエネルギーを強く感じた。今後も発展が続いていくのだろうと予想された。

太原は歴史を感じさせる町並とともに、最先端の大学研究と企業活動が融合されたエネルギーを強く感じた。今後も発展が続いていくのだろうと予想された。

橋渡し役をされている。中国での研究環境などを紹介いただいた。

27日午後は福州国家ハイテク区を訪問。全体説明を受けたのち、同区内に位置する中国科学院福建物質構造研究所と福建国鏡中光電有限公司を見学した。いずれもイノベーションを駆動力としたハイテク発展の実現というスローガンの下、成果の産業化および事業の発展に多大な意欲を見せていたことが印象的であった。海西高新産業園(福州国家ハイテク区の一部)だけで約68平方キロという敷地面積の中に研究機関と企業が立ち並び、15項目にわたる支援政策の存在がそのような雰囲気形成するのだろう。

28日は福建星網鋭捷通迅股份有限公司(通信機器メーカー)と福建仙芝樓生物科技有限公司(バイオテック企業)を訪問。それぞれ2000年、1989年創業と比較的若い企業ながら、国のリーディングカンパニーに位置付けられる企業である。まず星網鋭捷では同社の主要製品の説明を受けたのち、生産設備を見学。機械化による効率化の結果、従業員が極めて少なかったことに参加者から驚きの声が上がっていた。

福建省は中国全土の中でも一人当たりGDP上位の省であり、省都である福州市は一地方都市とは思えないほどの勢いを感じさせた。

○太原

山西省太原市での初日となる27日の午前中に、太原理工大学を訪問した。太原は歴史のある都市で、古くから石炭の産地として知られている。太原理工大学は中国の「国家211プロジェクト」の指定校であり、幅広い分野の研究を行っているが、その中で石炭をより活用するための研究が現在も活発に行われている。

実際にラボを見学し、石炭から樹脂や航空用オイル等の化成品を生成すること、米国・ヨーロッパにも販売している脱硫技術、触媒の開発などの紹介を受けた。また、急遽、2年生の学生に学生生活に関する質問をする機会が設けられ、非常に身近なディスカッションをすることができた。日本側からは特に大学関係者から質問が多く出ていた。

午後は、大規模な鉄鋼連合企業である太原鉄鋼集団を訪問した。1日に1・2万トンの鉄鋼を生産する巨大な高炉は圧巻であった。また、中国が所有するタイの鉱山から原料の鉄鉱石をパイプラインで直送していること、大規模な管制室、次々に生産される巨大な鉄鋼板を目のあたりにし、そのスケールの大きさに衝撃を受けた。日本側の参加者からは、技術的な質問が数多く出ていた。

28日は、発電事業を手がける山西国際エネルギー集団を訪問した。従来の火力発電や天然ガス利用に加え、風力発電や太陽光発電などの新エネルギー開発に取り組んでいる紹介を受けた。また、中国の大学や米国ウェストバージニア大学との産学連携プロジェクトを進めており、研究開発に力を入れていること、環境面にも配慮し年間CO₂収集量は3000ト

ンに上ること等、様々な取り組みを進めていることが十分に伝わってきた。日本側からは、技術的な質疑に加え、中国における電力事情、発電と送電の役割分担など、実情に踏み込んだ質問が多く出ていた。その後、山西博物館を訪問し、山西省特有の歴史に触れ文化的な理解を深め、交流を図った。